

産業利用報告会 サンビーム挨拶

共同体運営委員長 飯島 賢二

(松下電器産業(株) 中尾研究所 技監)

ご紹介に預かりました飯島でございます。サンビームを代表しまして、一言ご挨拶を申し上げます。

本日は早朝から、またお足下が悪いにも関わらず第5回産業利用報告会にお集まりいただき、ありがとうございます。

私どもサンビームは、今年重要な節目の年を迎えました。この活動を始めてちょうど10年ということです。この8月には次の10年の契約を再びJASRI 殿とさせて頂きました。この10年間、我々産業界はSPring-8を活用させて頂き、本当に多くの成果を生むことが出来ました。この間、文部科学省様を始め関係部署の方々にはご支援をいただきまして、本当にありがとうございました。御礼申し上げます。

我々産業界は、材料を使っていろいろな製品を作り、皆さんのお役に立とうということで事業を進めております。エレクトロニクス業界に限って考えて見ますと、1950年、60年、70年、この時代は材料そのものが開発されて、それがいろいろな新製品を生み出し、あるいは製品の性能向上に繋がっていった時代だと思います。その後80年、90年代は、半導体がドライブしたと思うのですが、微細化をして新しい付加価値を付けていこうという時代になりました。例えて言えば「食材の時代から調理法の時代」というのが一般の認識かと思います。このサンビームの活動が始まりました1990年後半から2000年というのは、世間でナノテクノロジーという言葉がよく言われるようになった時代と一致しております。そのナノテクノロジーについては様々な解釈があるようです。当時、半導体分野では既にサブミクロン、ナノの精度での「もの作り」に入っていましたし、材料技術者にとって原子分子の概念を扱うことは当然のことでありました。私の理解では、ナノテクノロジーというのは単に微細化とか、原子分子を見るということではなく、原子分子あるいはエレクトロンといったところまで踏み込んで、そこで起こっている現象をさらに突き詰めていって、物理を明らかにして新しい材料やデバイスに繋げていく。そして実際のデバイスや製品はマクロなものですから、新しい現象や物理がマクロな世界でも発現するようにプロセスを開発してゆく。そういう一連の大きな流れを指しているのだらうなと捉えています。そういう意味で「食材の時代・調理法の時代」から「ナノテクノロジーの時代」というか、材料プロセス技術は第三の時代に入ったかなという認識をしております。サンビームは13社が非常に上手く連携をとって新しい時代を作る活動を進めてきたと思います。今回、新たに3億円ほどの設備投資をさせて頂いて設備更新をいたしました。その結果、今まで以上に精密な分析あるいは細かな計測が可能になりました。こういうのをもっともっと活用して、我々としては日本の材料分野を盛り上げていきたいというように考えております。

本日は利用報告会というタイトルを掲げておりますけれども、こういった機会を活用してお互いの解析や解析法の情報交換をしていただき、あるいは人のネットワークを築いていただき、次の10年に向かっての礎にしていきたいと思っております。二日間と大変短い時間ですけれども、皆様、活発なご議論の中から、次の新しい材料開発のアイデアを一つでもつかんでいただき、新時代へのプラン創出に役立てていただくことを期待しまして、私の挨拶に代えさせていただきます。